

熊本県学校体育研究発表大会報告

熊本市中体研理事長 吉田 明日香

熊本市中学校体育研究会主題

自ら運動の喜びや楽しさを求め 生涯にわたり健やかな心と体をはぐくむ保健・体育学習の在り方 ～主体的・対話的で深い学びを図る指導の工夫～

I 研究の目的

(1) 主題設定の理由

近年、情報化やグローバル化の進展が加速し、社会の変化を予測することが困難な時代となってきている。また、新型コロナウイルスの感染拡大で休校を余儀なくされたことにより、運動に親しむ習慣が減ったり、それに伴って生徒同士のつながりや体力の低下が懸念されたりしている。

また、本年度から全面実施となった中学校学習指導要領では、保健体育科の目標として、心と体を一体として捉え、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、『知識及び技能』、『思考力、判断力、表現力等』、『学びに向かう力、人間性等』を育成することが示された。さらに、同解説では、これらの資質・能力の三つの柱の育成に向けて、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して相互に関連させて高めることが重要であるとしている。

これらを受けて、熊本市では、生徒一人一人が社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、取得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを分かりやすく伝えるなどしながら、自らの可能性を伸ばしていく力を身につけるために、生徒の実態に即した授業づくりを展開してきた。

そこでは、深い学びにつながる課題解決する姿（自己の能力やチームの特徴を分析し、言葉や動作を用いて助言し合うことや、課題の到達度を互いに確認したり、新たな課題を設定したりして、能力に応じて運動の楽しみ方を見つけること）を設定し、生涯にわたって運動に親しむ態度を育成したいと考える。

本研究では、研究主題を「自ら運動の喜びや楽しさを求め生涯にわたり健やかな心と体をはぐくむ保健・体育学習の在り方～主体的・対話的な学習を図る指導の工夫～」とし、生徒が課題を解決したり、相手に分かりやすく伝えたりするとともに、生徒の思考を深めるために発言や意見交換を促したり、運動技能のポイントを分かりやすく示したりするなどの指導方法の工夫について前年度からの研究をさらに進めることとした。

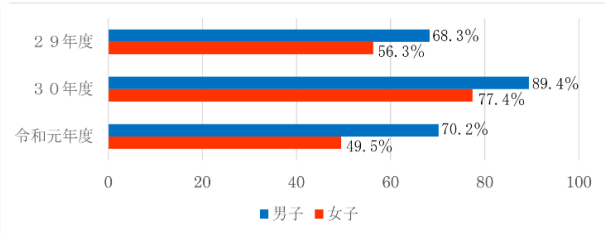
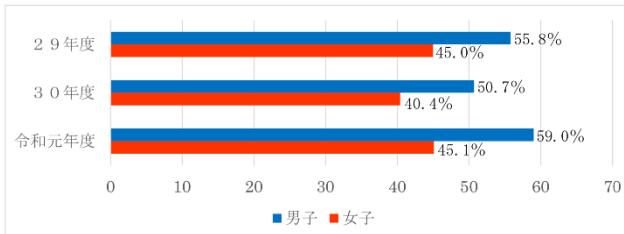
II 熊本市の実態から

平成24年度から体力向上コーディネーターを派遣し、体力向上に向けた指導助言、さらには生徒の運動意欲を高める授業のあり方についての研修会を行ってきた。その

結果、令和元年度の体力調査において、市の基準値（平成25年度から平成29年度の市平均値を平均した値）を上回る数が、前64項目中26項目（男子7項目、女子19項目）になった。さらに平成30年度の市平均値との比較でも24項目（男子11項目、女子13項目）に向上が見られ、体力が向上傾向にあることが分かった。

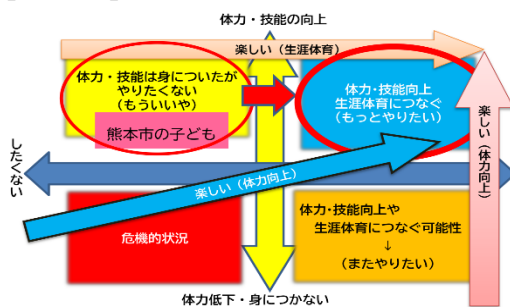
【資料1】 体育の授業への好感度

【資料2】 運動習慣（週3日以上運動への従事の割合）



体育の授業への好感度（「楽しい」の割合）が男子8.3%増加、女子4.7%増加となり、体育の時間を楽しく活動する生徒が増加したことが体力向上につながったことが分かった。また、体力が向上した一方で、運動への従事の割合としては対前年度比で男子19.2%の低下、女子27.9%の低下となり、体力は向上したものの、運動習慣の割合が減る結果となった。

【資料3】 目指す方向性

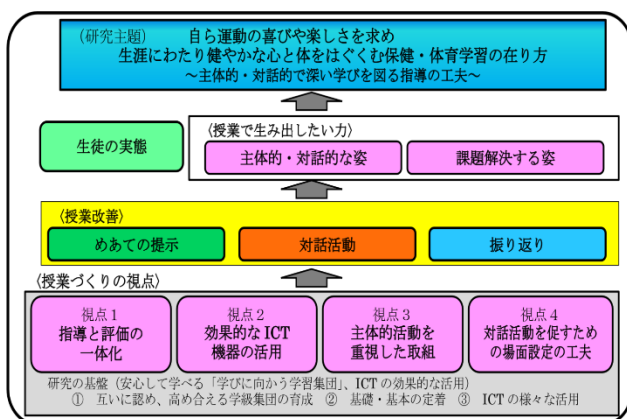


以上のことから、熊本市の子ども達は体力は向上し、体育の授業も楽しいと感じてはいるものの、生涯体育につなぐ運動習慣まで至っていないことが分かった。そこで、体力・技能も向上しながら「自ら運動に親しむ態度」の育成を目指したい。

III 研究の仮説

- ① 教材の開発や場面設定の工夫, ICTの効果的な活用を行えば, 対話活動が活性化し, 生徒が運動の楽しさを味わいながら進んで運動に親しむことができるだろう。
- ② 生徒の主体的を狙った課題提示や取組の工夫を行えば, 生徒同士で学びを深めながら主体的に課題解決をし, できる・わかる喜びを味わうことができるだろう。

IV 研究構想図



V 研究の実際

視点1 指導と評価の一体化

○指導すべき内容とその評価を確認

「くまもと市中学校授業研究会」及び各中学校の保健体育科授業研究では、県中体研で作成した評価規準表を基にした学習構想案を作成するようにする。特に「何ができるようになるか」という目指す資質・能力と「何が身に付いたか」という指導と評価の一体化に注意を図りながら単元の組み立てを図った。

単元終了時の生徒の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）	
喫煙、飲酒、薬物乱用の心身へのさまざまな影響（害）について理解し、課題の解決に向けて、生活の質を高めるという視点から科学的に思考・判断して、それらを他者に伝えたり、表したりできる。	
単元を通じた学習課題（単元の中心的な学習課題）	本単元で働かせる見方・考え方
喫煙・飲酒（未成年の）、薬物乱用はなぜ禁止されているのだろう	個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境作りと関連付けること。

【めあて】 守備の時の大切な動きができるようになる。

【具体的評価規準】【技⑤】

プレーを開始するときは各ポジションの定位置に戻ることができる。（観察）

【具体的評価規準】

- 飲酒は酒に含まれるエチルアルコールの作用により心身にさまざまな影響（害）を与え、健康を損なう原因となることを言ったり書いたりしている。（知識）（方法：学習シート・発言）
- 飲酒と健康について、事柄や情報などの原則や概念をもとに整理したり、個人生活と関連付けたりして、自他の課題を発見している。（思考・判断・表現）（方法：学習シート・発言）

視点2 効果的な ICT 機器の活用

○わかりやすい授業作り

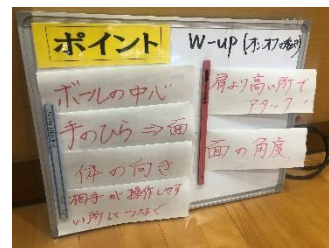
基礎的・基本的な内容習得のため、ICT 機器を活用し視覚的に学習内容を把握できるようにした。本時の目標や学習の流れがわかるよう掲示物や ICT 機器等を使用して、学習の見通しが立つようにした。そうすることで、支援を必要とする生徒も、見て、聞いて、理解できる機会が多くなり、積極的に授業に参加するようになった。また、生徒同士で ICT 機器を使い、動きの確認や伸びを実感できるようにした。それによって自分の動きの改善点について考えたり、具体的な言葉を使ってアドバイスし合ったりできるようになった。



〈学習内容の把握〉



〈わかりやすいめあて〉



〈ポイントの確認〉



〈作戦会議〉



〈伸びの実感〉

視点3 主体的活動を重視した取組

○本時のめあての達成に向けた活動

体育分野・保健分野ともに話し合い・対話活動を取り入れ、現在の自分の活動や取組を振り返ったり、気づきや考えを述べるグループワークの時間を確保したりした。また、友だちと協力し、コツを確認しながら何度も繰り返すことで、できなかった運動ができるようになるような場面を設定した。



〈話し合い・対話活動〉

○体育・保健の専門性を重視

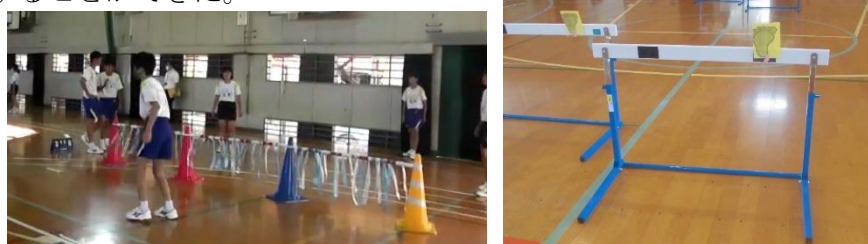
専門性を重視したティーム・ティーチングの実施（専門種目・養護・栄養教諭等）、外部講師（ゲストティーチャー・地域指導者・校医等）の活用を行い、身近な題材や話し合い活動の手法を用いて、思考・判断する力を高め実践及び生涯につなげる活動を取り入れた。



〈養護教諭とのTTによる授業〉

○練習やゲームの工夫

運動が苦手な生徒も楽しさを感じることができる単元の特性に触れたドリルゲーム・タスクゲーム等を実施した。またドリルゲーム・タスクゲームや約束練習等を工夫し、運動量を確保するとともに単元にはじめてふれる生徒も、運動が苦手な生徒も楽しく安全に参加できるよう学習を行った。さらに、授業の中で競い合ったり、友達と同じ動きをしたり、ふだんと異なる運動感覚も経験させたりすることで、できる生徒はより技能向上を目指したり、苦手な生徒も能力差が目立たない動き等で楽しさを感じたりすることができた。



〈場づくりの工夫〉

視点4 対話活動を促すための場面設定の工夫

○教材・用具・資料の工夫

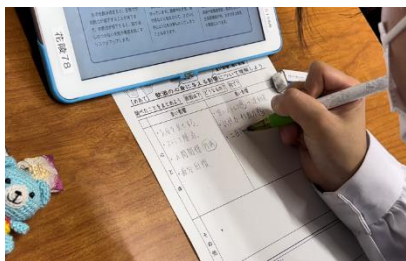
用具の活用方法や場の設定の工夫，安全な補助器具や補助の方法，資料の使い方や練習方法をわかりやすく示すようにした。



〈基本用語や道具の使い方の提示〉

○指導の工夫

発達の段階や個人差を踏まえ指導に当たり，生徒自らが課題を発見し，課題に応じた練習の場を選び，計画的に取り組むことができる活動の工夫や生徒が体の動かし方やうまくなるコツを理解できるような思考・判断の場面を取り入れるようにした。また，運動が苦手な子どもや嫌いな子どもが運動のおもしろさを見つけ出すことができる授業作りのために，グループ分けの工夫をしたり，ゲームのルールを考えさせたりした。自分達でルールを決め，難易度を変えたり得点差をつけたりすることで，それぞれが個人の課題を達成するために練習を工夫したり，休日も家族で取り組んでみたりする子どもが出てきた。



〈課題解決に向けた調べ学習〉



〈コツの伝授〉



〈安全な補助〉

VII 研究の成果と課題

主体的活動や話し合い活動，ICTの活用などを通して，自分の動きを客観的に確認したり，仲間へアドバイスをもらったことによって，課題を見つけ改善できたと感じる生徒が多かった。また，「自ら運動に親しむ態度」への意識が高まってきた。

今回の実践を通して，保健体育における主体的・対話的で深い学びを意識した授業を経験できたことは，大きな学びとなった。子ども達に主体性をもたせた授業を展開するための指導の工夫や発達段階に応じた配慮をしていくことで，子ども達が自ら課題を見

抽出によるアンケート結果

項目		令和元年度	令和3年度	備考
運動・スポーツの好感度	男子	78%	89.8%	11.8%↑
	女子	68%	76.7%	8.7%↑
体育の授業への好感度	男子	59%	92%	33%↑
	女子	45.1%	81.2%	36.1%
運動習慣(週3日以上) 運動への従事の割合	男子	70.2%	83.15%	12.95%↑
	女子	49.5%	76.3%	26.8%

つけて活動する姿も多く見られた。また、子ども達に視覚的に分かりやすいようにICT機器の活用をしたり、子ども達同士でもICTを活用しながら動きの確認や作戦会議などを行ったりすることで、効果的なICTの活用力も高まった。ただ、子ども達一人ひとりの課題に対して、常に意識をもたせるための工夫がないと、何のための撮影なのか、何のための話し合いなのかをぼやけてしまうこともあった。今後は、話し合いの視点を明確にするための視覚的配慮や臨時休校や分散登校などで懸念される体力低下などの課題、さらには養護教諭とのさらなる連携に積極的に取り組みながら、研究を進めていきたい。